



ア  
ガ  
ガ  
ガ

男が待っていたのは、まさしくその言葉だった。

溢れ出しそうになる狼の笑みを抑え込み、人の良い、頼りになる大人の男性の仮面を維持する。

すると、衣擦れの音が響き、あかねはあつという間にショーツだけを残した姿となった。

均整の取れた身体。絹のように滑らかな肌の艶。遠慮がちな、しかし縋るような熱視線。欲求と羞恥との狭間で揺れているのか、自分からブラをはずしたはずなのに、恥じらうように胸元を隠す仕草も、男の獣欲をそそつてやまない。

ズボンの中でとつくのとうに、痛いほど膨らんでいた肉棒が、さらなる膨張をみせた。勢いのままに無理矢理押し倒しても、今のあかねが拒絶することはなかっただろう。

そこらのオンナ相手であれば、その方がずっと手軽で良い。しかしあかねは、紛れもない逸材だった。

天才的な演技力を持つ金の卵というブランド価値に、抜群の美貌。

それでいて、演技以外への自己評価があまりにも低かった。真面目さゆえに、馬鹿正直に世間からの非難を受け止めて——崩れた。



この天才的な女優の卵を、自分の色に染め抜くことを考えれば、興奮するなという方が無理というものだった。いつもの何倍も手間のかかった、まわりくどい方法を選んだのも、より深く、黒川あかねというオンナを染め上げるためだった。

「あかねちゃん」

男は緊張した声音で、潤んだあかねの瞳を見つめ返す。

半分は演技、残りの半分は、自分の獣欲が溢れて見抜かれやしないかという本当の緊張でもあった。こと演技に関してはあかねは間違いなく一流だ。普段であれば、それが演技であると簡単に見抜けたことだろう。だが今のあかねに、そんな冷静な判断はできない。できなくなるようにしてきたのだから。

「今のあかねちゃんは酔っ払って、気持ちを勘違いしてるだけだよ。女の子が勢いでそんなこと言うものじゃない」

自分で言っておいて、噴き出しそうになるほどに白々しい台詞だった。

だがあかねの瞳は、さらに熱を増して男を見つめる。

「勘違いじゃ……ありません。私、あなたのこと……」

「だとしても、抱いてくれなんて……実際に会ったのは今日がはじめてだし、歳だって倍近く離れてる」

「そんなの……関係ないです。私のことをわかってくれるのは……あなただけなんです……」

込み上げる笑いを堪えるのに、男は必死になる。

火照りきつた頭が、冷静な判断力を取り戻せるわけがないとわかっている。

あれだけの量の特製カクテルに、この部屋に充滿するセックスアロマ。

我慢などできるはずがない。結局はこれからもう数分としないうちに、男の食い物になることは決まっている。

むしろ今すぐに、人目も憚らずに自慰をはじめないだけ、あかねの理性は強靱であると言えるくらいだった。

それでも男が拒絶のポーズを見せたのは、乗り気ではなかった男を、自分が強い意思で押し切ったのだという認識をあかねに持たせるためだ。

「やっぱり、私じゃ……ダメ、ですか……?」

「そういうことじゃなくって……あかねちゃんみたいな子にそう言ってもらえるのは嬉しいよ。だけどそういうことには順序が……」

「自分でもおかしいと思いますけど、我慢できないんです。キス、してから……あなたに抱いてほしくって、他のことなんて考えられなくなつて——」

ごくり、と息を飲んでから、あかねはスカートをたくしあげて自分の下着を示した。

「こんなに、なってるんです……」  
生真面目さが表れた上品なショーツには、お漏らしでもしたみたいのに、ぐっちよりと蜜の染み込んでいた。

「下着のデザインの上品さと、蜜の溢れ方とのギャップが、かえっていやらしさを際立てている。

「これからずっと恋人になって、なんて言いませんから……たまには息抜きをした方がいいって言ってくれたのはあなたじゃないですか。お願いです……今夜、ひと晩だけでいいから——」

もう、限界だった。

これ以上焦らしていたら、酔っ払って、頭の回らなくなった間抜けなオンナですらはつきりとわかっってしまうくらいに、本性が溢れるのは間違いなかった。

「あかねちゃん」

真っ直ぐに、瞳を見つめ返し、名前を呼ぶ。

そんな単純なことで、オンナがより深く、墮ちることを男は経験で知っている。

おそらくは男性経験など一度もないあかねには、それはいつも以上に靦面に効いた。

「わかったよ。そんなに言うなら……今夜、俺があかねちゃんの恋人になってあげる」  
子供のわがままに付き合うように装いながら、男はズボンを脱いでいく。

普段よりも二割近くも膨張したモノのせいで、脱ぐのにも手間取った。

姿を現すのは、数多くのオンナを、それ一本だけで色狂いに変えてきた男の自慢の逸物だった。剛直の一言に相応しい、太さと長さを兼ね揃えた女殺しの肉槍に、熱に浮いたあかねでさえも息を飲んだのがわかった。カリ首は大きく抉れて、膣内を擦り上げ、引っ搔



くのに適した形状<sup>カタチ</sup>。竿そのものにも極太の血管が這いまわって、凶悪にすぎた。

興奮のあまりに溢れ出した濃厚な先走りは、それだけでも充分にオンナを孕ませられそうに思えた。

手の届く位置の棚に大量にストックした、特大サイズの避妊具を取りだすと、慣れた手つきでつけていく。

「本当に、いいんだね？」

卑猥なかぶり物で身を飾った巨根を、あかねは魅入られたように見つめていた。

とうにクロツチ全体に染みを拡げているというのに、今もなお蜜を溢れさせる割れ目に生唾を呑み込んでから、男は念を押す。

あかねがゆっくりと、しかし確かに、こくん、と頷いて、ショーツをずらす。

「んっ……♥」

そんなわずかな擦れですら強烈な快感となるほどに敏感になっているのか、あかねの喉奥からは甘い嬌声がこぼれた。

露わになった女陰は、溢れ出る蜜によって妖しげな光沢を帯びて、サキュバスのように男を誘惑してくる。

零れる笑いを抑えることすら諦めて、男は己の怒張をあかねの割れ目に押し当てた。ぐぢゅっ。

その音だけで、経験の浅い男であれば射精に達しかねないほどの卑猥な音が、あかねの



処女裂から生まれる。

\*

「ふあ、んうっ……♥」

彼の、少し恐いくらいに大きな男性器が、誰も受け入れたことのないあかねの割れ目に触れる。極薄とはいえ避妊具を挟んでいるというのに、やけどをしてしまいそうと錯覚するほどの熱感があった。

恐怖はある。だけどそれを感じる部分が、酔いと、お腹の底から湧き上がる熱とで麻痺させられているのがわかった。麻痺した恐怖よりも、男を求める欲求の方がずっと強い。

「キて、ください……」

彼の手が、あかねの足を掴み、それを把手<sup>とって</sup>代わりに腰をゆつくりと押し込んでくる。ぐちゅ、うううっ。

割れ目が、こんなにも拡がるのかと思うほど開いて、ピンクの内側を見せながら、彼を呑み込んでいく。

「あ、んっ、あああっ♥」

先端の、亀頭の部分が挿入<sup>はい</sup>ってくるだけでも、さほど自慰の経験も多くないあかねにとつて、それでもはつきりわかるほどの凄まじい快感だった。



恐怖は簡単に快楽に融けていく。もつと深く、もつと奥に、彼を感じたくて、彼を見つめる。先ほどの優しさと氣遣いの色の奥に、隠れきらない獸欲が浮かんできていることさえも、今のあかねにとつては、彼に求められている証のようで嬉しいだけだった。

ゆっくり、ゆっくり——黒川あかねという人間を内側から融かそうとするように、彼はあかねの腔内を進んでいく。狭い未通の腔内は、しかし巨大な侵略者を嬉々として迎え入れる。収まっていく体積と同じ分、いやそれ以上の量の愛蜜が、滑らかな挿入を助けていた。

あかねの頭の中では、官能の火花がパチパチと散っていた。快感と多幸福感とが、ヒビの入ったあかねの心に深く、強く、染み込んでいく。

長大な肉の蛇がまだ三分の一も収まっていないあたりで、彼の腰の動きが止まった。彼を止めたものが、自分が十余年の人生で守ってきた純潔の証なのだと氣付いても、躊躇はなかった。

目と目が合う。それだけで想いは伝わった。彼と通じ合っていると思うだけで幸せな気分になれた。今この瞬間だけは、自分と彼以外の存在が、あかねの中から薄れて消えた。彼の体重が純潔の証にかかり——繊維の断裂するような感触とともに、あかねはオンナになった。

訪れるだろうと覚悟していた痛みはなく、代わりに生まれたのは途轍もない快感だった。愛する人に純潔を捧げることができたという充足感だけではない。自慰とは比べもの

ならなかった挿入の快感と比較してさえ、段違いな圧倒的快感があった。

「あ、ああっ、んあ、あああああっ——♥」

プシュツ、と。霧吹きのように勢いよく、大量の潮が飛沫<sup>しぶ</sup>く。潮と一緒に、残っていたかすかな理性までも弾けてしまったようにすら思えた。

自分が絶頂を迎えたのだとあかねが気付くのに、たっぷり一分以上を必要とした。

「わ、たし……」

「イツちゃったみたいだね。普通の子は痛がるはずなんだけど、あかねちゃんはエッチな子だね」

彼の言葉は、催眠術のように心にそのまま染みこんでくる。あかねに生じたのは、恥ずかしさでもなければ、ましてや後悔でもなく、そんなエッチな子であることで、彼に嫌われやしないかという懸念だった。

「あ、あの……」

あかねの言わんとすることを察したのか、彼は優しく微笑んだ。

「安心して。あかねちゃん。エッチなあかねちゃんは、すごく魅力的だよ」

「あ……♥」

欲しかった言葉が、欲しかったときに与えられる。それだけで、今のあかねを満たしていく。

痛みこそなかったものの、膣からはジンジンと、かさぶたを引っ掻いたような疼きかも

どかしさを生む。

彼に肯定されたことで、あかねの中で、淫乱な自分という性質が膨らんでいく。

「奥まで……きて、ください……♡」

もどかしさをどうにかしてほしくて、腰をくねらせながら彼にねだる。彼の口端が、にい、と吊り上がった。

「これからは、いくときにはいくって言うんだよ」

「は……はい……♡」

あかねの従順な返答に気を良くした様子で、彼がさらに深く挿入<sup>はい</sup>ってくる。愛液と破瓜の証の混ざったピンク色の液体がトロリと結合部から溢れていく。

「気持ちいい？」

「はい……すごく、気持ちいい、です……♡ あの……あなたの方は……」

「すごく気持ちいいよ。俺とあかねちゃん、相性いいのかもね」

彼の返事が、心を満たす。満たされていく感覚の中で、彼がさらにあかねの腔内<sup>うちがわ</sup>を満たして最奥にまで辿りつく。

「全部挿入<sup>はい</sup>しちゃったよ」

「は、いい……♡」

処女の腔には大きすぎる肉の凶器を受け入れて、押し拵げられる圧迫感こそあるものの、苦しさはなかった。

最奥に亀頭がハマるような位置のまま、彼がクイ、と腰をさらに押し込んだ。

「ツ——♥ ツツ——♥」

頭の中が真っ白に染まる。彼の姿と、彼の感触だけが世界のすべてになる。

「ほら、ちゃんとイクって言わなきゃ」

「あ、ごめ、なさっ——」

「ほらっ」

さらに亀頭が杭のように打ちつけられる。

「イツ、イクツ♥ イくっ♥」

教えられたとおりに、あかねは叫んだ。いやらしいことを口に行っていると思うと、身体の火照りは増す。いやらしい自分を彼が肯定してくれるという事実が、それをさらに後押ししていた。彼の言うとおりにして、いやらしい女になれば、彼にもっと好きになつてもらえる、と。

「あかねちゃんの膣内<sup>ナカ</sup>、イツてキュウキュウって収縮してるよ。可愛いね」

「あ、ああ……♥」

「動くよ。いいね？」

「は、はい……♥」

あかねが答えると、彼はゆっくりと、巨根を引き抜いていく。

挿入れられるときは逆向きの動きはしかし、ただ逆になっただけとは思えない快感を

生んだ。大きくくびれたカリ首が、膣壁を引つ掻く。

「あつ、ふあ、ああつ♥」

絶頂を迎えたばかりで敏感なあかねの身体に、快感が刻み込まれていく。彼の体積が自分の中から抜け落ちていく喪失感と、それを埋める強烈な快感に、あかねの脳は狂わされていく。

「声、抑えなくっていいよ。もつとあかねちゃんのエッチな声、聞かせて」  
言いながら、彼はまた、腰を深く突き込んでくる。

「は、あイクっ、んっつ——♥ イクっ♥ またイキますうっ♥」

声を抑えることをやめ、受けた快感の大きさだけ、蕩けた声が溢れていく。  
これまでの人生すべてが、塗り替えられていくような快感が連続する。

パンッ、パンッ、と。肉を打つ音が連続する。ぐちゅぐちゅと蜜音が響き、それ以上に甘い嬌声があかねの喉を抜けていく。

——イク。

——イク。

——イク。

宣言を繰り返すたびに、自分がいやらしいオンナになっていくのがわかった。  
膣はピストンのたび、彼専用の形状カタチに耕カキされていく。

「あかねちゃん、そろそろ射精だすよ」

絶頂を繰り返したあかねの思考は、だす、という音の意味すら、一瞬理解できなかった。しかし意味などわからずとも、彼の言葉を拒絶するという選択肢を、今のあかねは持っている。

「はいっ♥ キて、キてくださいいっ♥」

彼のピストンが激しさを増し、あかねの絶頂のスパンも加速していく。

「射精るっ……!」

力強く膣奥が叩かれ、その瞬間、彼を包む避妊具が、爆発したように膨らんだ。

「あっ♥ ああっ♥ イッ♥ イくっ♥ またイッちやいますっ——♥」

避妊具越しではあるものの、火かき棒のような熱を帯びた肉棒そのものよりもさらにずつと熱いものが吐き出されていく。自分の子宮ナカに注がれていると錯覚するその勢いに、あかねは今ままで一番大きな絶頂に達した。

\*

「はあ……♥ はあ……♥ あ、ああ……♥」

恍惚とした表情で荒く呼吸を繰り返すあかねを見下ろしながら、男は満足の笑みを浮かべていた。とてもではないがあかねに見せられない、肉食獣の笑み。

あかねは魅力的だった。容姿だけではない。嗜虐心と庇護欲をそそられる性格もそうだ





が、身体の具合と一点においても、男が食つてきたオンナの中で、三本の指に入る。それがまだ調教を施す前だというのだから、今までで最高の素材であることに疑いもない。こなしたラウンド数をカウントするように使用済みの避妊具の中身も、いつもより量も、濃度も段違いだった。一度でも生で射精していれば、妊娠確定と自信を持って言えるほどに。

なによりも男を満足させていたのは、あかねの真面目さと依存度の強さだ。男がエッチなあかねも魅力的だ、と言った途端に、あかねは一気に乱れた。それまでは持ち前の生真面目さが痴態を晒さないよう自らを律していたのだろう。それが男の言葉ひとつで、男に好かれるオンナになろうと、抑えることを放棄した。

もちろん男には、今のあかね以上に自分に依存するオンナを何人も作っている。彼女は男の命令ならば顔も知らない男にでも股を開くし、裏ビデオへの出演だって嬉々としてやる。だがあかねはまだ最初の調教でしかない。この時点でここまでの依存を引き出せているのは、男にとって良い意味での誤算だった。

——簡単には終わらせない。

「時間を掛けて、じっくりと、最高のオンナに染め上げてやるよ」

整った顔立ちを、悪魔のように歪めながら、男はあかねに聞こえないように小さく呟いた。